

ドクターインタビュー

亀崎 佐織(かめさき さおり)先生

かめさきこども・アレルギークリニック 院長

地下鉄御堂筋線「緑地公園」駅から徒歩5分。「かめさきこども・アレルギークリニック」は都心に近い住宅地、大阪府豊中市に平成18年に開院されました。小児科・アレルギー科の専門医で、なんでも相談できる地域のホームドクターとして活躍される亀崎先生にお話を伺いました。

——先生が小児科医を目指されたきっかけなどございますか？

祖父は内科、父は小児科の開業医でした。熊本市内で開業していた父は地域でとても慕われていた医者で、父の診療する姿を見ていたので、自然と小児科医への道へ進みました。熊本大学医学部を卒業後、国立岡山病院で研修をして、結婚を機に京大医学部小児科医局に所属しました。

アレルギーを専門に始めたのは、平成5年より勤務した大阪府済生会中津病院で免疫アレルギーセンターを担当し、末廣豊先生のもとで勉強したことがきっかけです。そこで喘息やアトピー性皮膚炎の重症児の長期入院治療や、外来診療、アレルギー教室での患者指導などいろんな勉強をさせて頂きました。ステロイド忌避が広がった頃でしたので、乳児の重症のアトピー性皮膚炎も多かったですね。病院の診察ではアレルギー疾患の患者さんは多いので次の予約が2か月後になるのです。その間に、患者さんが喘息で入院してしまったり、湿疹が酷くなってしまったりすることがありました。また、病院に来る患者さんは重症になってからの方も多くて、なんとか、もっと早くから重症になる前に治療できないかと考えたのが、開業のきっかけです。慢性疾患のアレルギーは患者さんの生活に深く関わっているの、患者さんの暮らしの傍で早期対応し長期管理が出来るよう、通院しやすい場所でクリニックを開院しました。少し悪くなったらすぐ受診できる環境なら患者さんも安心だと思いますね。

——日々の診療で感じておられる事や、最近の患者さんや保護者の方の変化などお聞かせいただけますか。

乳児アトピー性皮膚炎は、食物アレルギーとの関連もあり治療の早期介入が大切です。TARCの数値を見ながら湿疹を早くからプロアクティブ療法で治していくと、食物アレルゲンの感作が減ることが期待されています。

当院では乳児でも初診時から積極的にTARCを調べます。炎症の程度を数値で理解してもらって、プロアクティブ療法でできるだけ皮膚を良い状態にします。湿疹がある状態で離乳食を始めると、食べて痒いのかもと痒いのかかわらない。皮膚をきれいにすると、食べて痒いのが出たら容易に診断ができます。ですから、乳児のアトピー性皮膚炎のコントロールは必須なのです。

最近、ステロイド外用への偏見は減っていて、親御さんも湿疹があると、乳児でも痒いのがかわいそうなのでステロイド外用薬を塗ってもいいからきれいにしたいと考える方がほとんどです。プロアクティブ療法について、皮膚はきれいだとバリア機能があるけど、荒れていると経皮感作でアレルギーがすすむ事を冊子などを使って説明すると、ご家族は、納得して一生懸命やってくれます。恐がらずにステロイド外用薬をしっかり塗るとすぐ治ることが多いので、それこそ早期介入が大事ですね。薬をどこにどれだけ塗るかは看護師が実際に塗って塗り方の指導をしています。その他にも、お風呂の入れ方とか、石けんの使い方、保湿の仕方、服の選び方なども具体的に説明しています。

——食物アレルギーの治療について、また、最近の傾向など教えていただけますか？

食物アレルギーの場合、食べ方を具体的に指導します。卵を除去と言っても、どこまでかわからないし、解除してもいいとなっても何から食べていいかわかりにくいですね。1歳未満の赤ちゃんの離乳食は順番も大事です。前半では食べられなくても、後半なら食べられるものもあるので、具体的な食材の調理法を説明します。やはりマニュアル的なものは必要ですね。最近離乳食のベビーフードを使うお母さん方が多いのですが、本当は自分のごはんを少し分けてあげればいいんですよ。ごはんを柔らかくしたいとおかゆにする、魚を



亀崎 佐織(かめさき さおり)先生のプロフィール

熊本大学医学部卒業。
国立岡山病院小児医療センターにて研修。
京都大学医学部小児科医局に所属し、京都・奈良の病院小児科勤務。
アメリカ・ワシントンDC、ジョージタウン大学で分子生物学の実験に携わる。
平成5年より 大阪府済生会中津病院小児科勤務。
平成6年より 大阪府済生会中津病院 免疫・アレルギーセンター担当。
平成18年5月 かめさきこども・アレルギークリニック開設。

日本小児科学会専門医
日本アレルギー学会専門医
地域のアレルギー相談や講演会の講師、保健所職員研修、エビペン講習会の講師を務める。

一切れほぐして、お豆腐をちょっと、という具合に離乳食を作る負担感を減らす指導もしています。

最近増えたと感じるのはイクラやナッツのアレルギーですね。自分で食べていなくても、まわりにイクラやナッツ好きの人がいると経皮感作も考えられます。また、果物のアレルギーも増えています。OAS(口腔アレルギー症候群)ですね。花粉症があるとその花粉と同じ系統の木の植物の果物に反応します。

食物アレルギーはここ20年で様変わりしていて、非常に重症のケースも多くなっています。アナフィラキシーの対応として、エピペンの使い方の指導が必要です。最近は学校も対策に力を入れていて、生活管理指導書の提出も必要になりましたが、それでもまだ地域差がありますね。学校で講演することもあり、もっとみんなに理解してもらって、学校や病院など地域で連携できたらいいと思っています。

——患者さんや保護者の方へメッセージなどお願いします。

赤ちゃんって本来は、お乳を飲んでしっかりケアすればぐっすり寝て、泣くのはお腹すいたか気持ち悪いときぐらいで普通はニコニコしているものなんです。だけど、かゆい湿疹があると、イライラして痒くて眠れないからすぐ起きるし、機嫌が悪くてあまり笑わない。初めて子育てをする親御さんにとっては、アトピーって知らなかったら、子供ってこんな育てにくく大変なものなのかと思ってしまう。そうではなくて、本当は「子育てってこんなに楽しいんだよ」って私は言いたい。育てる身としては、ニコッと笑ったのを見てかわいいなと思ってお世話するのだから、一生懸命いろんなことをしているのにお子さんが泣いてばかりいたら親御さんもイライラしちゃいますよね。治療して皮膚もきれいになると、「子どもってこんなに笑うんですね」「こんなかわいいなんて嘘みたい」と言われて、親御さんの表情も違ってきますし、そういう健全な状態にすることが小児科医の役目だと思っています。一番かわいい子育ての楽しい時期を、喘息で眠れないとか痒くて機嫌が悪いか、そんなもったいないじゃないですか。それが長く続くと親子関係にも影響が出てくるので、早めにちゃんと治療することが大切です。様子がおかしいと思ったら早めに受診してください。

——ありがとうございました。患者さんはもちろん、そのご家族のことも考えておられる亀崎先生。

日々忙しいので、休日は自宅での音楽鑑賞や読書がストレス解消法とのことです。